

① 戸叶勝也 著
『ヨーロッパの出版文化史』

(朗文堂)

書写本の華麗さが最高潮期を迎えていた15世紀半ば、グーテンベルクによって印刷術が発明され、その後の出版文化の発展に大きな影響を及ぼしました。また彼の活字に対する強いこだわりが、美的にも芸術的にも書写本に匹敵する作品を生み出したのです。

本書では、出版文化の流れとともにグーテンベルクの「四十二行聖書」をはじめ、ヨーロッパ各国の美しい書物が多数紹介されています。活字の美という書物の新しい魅力を感じられる1冊です

023.3-Tok (H.T.)

③ 英米文化学会 編著
『英文学と結婚：
シェイクスピアからシリトーまで』

(彩流社)

ジェイン・オースティンの「高慢と偏見」を読んでいたなら、「あれ？」と気になった部分がありました。主人公エリザベスの妹が若い士官と駆け落ちし、姿をくらましてしまったときのこと。二人の行方を推察する家族が「スコットランドに向かった、いや行ってない」と、唐突にスコットランドを話題にするのです。舞台はイングランドの片田舎のはず。なぜかなあというこの長年の疑問が本書で解明されました。当時のイングランドの婚姻法では結婚できない、あるいははたかないカップルが、スコットランドの「駆け落ちの聖地」グレットナ・グリーンを目指したのです。文学作品の時代背景や社会情勢を知ると、登場人物たちの心境がぐっと身近に思えてきますよ。

930.4-Eib (N.T.)



② こやま峰子 詩 ポスニア・ヘルツェゴビナの子どもたち 絵
『地雷のあしあと：ボスニア・ヘルツェゴビナの子どもたちの叫び』

(小学館)

ボスニアの内戦が終結してから10年。しかし戦争の爪跡は未だ多くの人々を苦しめ続けています。この本からは、地雷と隣り合わせの生活を強いられているボスニアの人々の現状が、“子どもたちの絵”を通して痛いほど鮮明に伝わってきます。

日本にいる限り戦争・地雷といったことは遠い世界の話のように思いがちです。しかし、この本が少しでも多くの人にとって今、この瞬間も地雷の犠牲になっている人がいるという現実を知り、考えるきっかけになってほしいと思っています。

726.5-Koy (Y.A.)

④ スペンサー・R. ワート 著 増田耕一・熊井ひろ美 共訳
『温暖化の〈発見〉とは何か』

(みすず書房)

地球温暖化問題については、1997年「京都議定書」が発行されてから、世界的な規模で温暖化防止策に取り組みが始まりつつありますが、その成果はといえば、大国アメリカなどがまだ議定書に批准していないことなどもあり、あまり芳しい状態ではありません。

本書は、地球の異常を人間が気づき、科学的データを蓄積、分析した温暖化発見の科学史といえます。

本書の著者は、科学史家、アメリカ物理学協会・物理学史センター長です。

451.85-Wea (H.T.)